

マルコによる福音書 3章31節～4章9節

2015年3月19日

古本 靖久

1、聖歌 466番 「道の辺(ほとり)に 蒔く種は」

2、お祈り

3、聖書輪読 （新約聖書 66 ページ）

4、テキストの位置

前回の学びでは、イエス様の元には、イエス様のことを理解できない人々がやってきました。それは身内の人たち、そしてエルサレムから来た律法学者たちでした。

ガリラヤ宣教②	3:13-19	呼び寄せられた 12 人
	3:20-21	イエスを理解できない家族
	3:22-30	イエスを理解できない律法学者
	3:31-35	イエスの母、兄弟、姉妹とは
	4:1-2	たとえで語る
	4:3-9	種と土地のたとえ

3章20～21節の話は、今回の前半部分である3章31～35節につながります。イエス様のことを取り押さえに来ていた身内の人たちはベルゼブル論争のあとに再び出てきます。このことによって読者は、律法学者も身内の人も、同じようにイエス様に反する人々だという認識を持つのです。

また後半では4章1～34節のたとえ集に入ります。イエス様は教える人として語り始めます。その内容はどのようなものだったのか、またどのような人に対して語られたのか、見ていきたいと思えます。

5、節ごとに

◆イエスの母、兄弟、姉妹とは

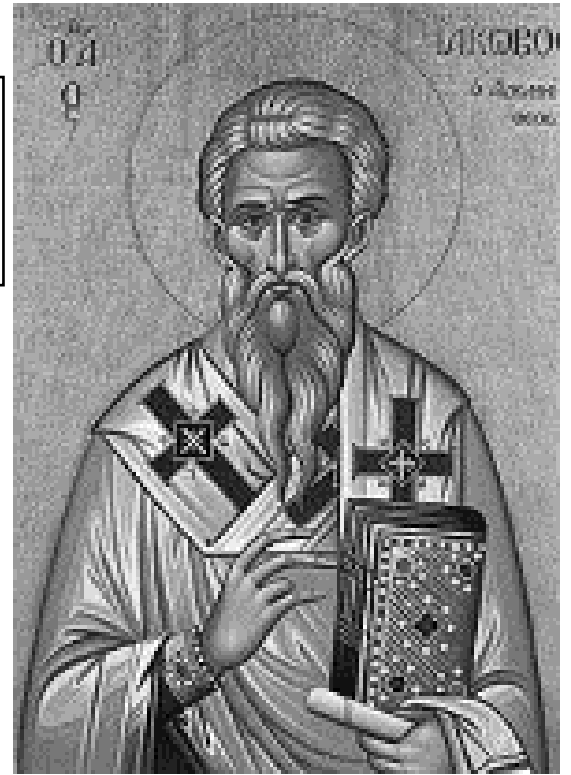
3:31 （そして）イエス（彼）の母と（彼の）兄弟たちが来て（来る。そして）外に立ち、人をやってイエス（彼）を呼ばせた。

イエス様のもとには母と兄弟たちがやってきます。父ヨセフはすでに亡くなっていたのでしょうか。彼らは外に立っています。このことは、身内の人たちとイエス様との間に距離があることを示唆します。

3:32 (そして) 夫勢の人(群衆)が、イエス(彼)の周りに座っていた。(そして彼らは彼に)「御覧なさい。母上と兄弟【姉妹】がたが外であなたを捜(さが)しておられます」と知らされると、(せた)。

「群衆(オクロス)」という語は、これまでもマルコ福音書に出てきました(2:4、2:13、3:9、3:20)。新共同訳聖書は何故かここだけ「大勢の人」と訳しています。しかしここでは、群衆とイエス様の身内との対比をはっきりさせた方がよいと思います。

ちなみに「姉妹」という語は1章1節の【神の子】と同じく、原本にあったかどうかは疑わしい語です。35節を見て、写本家が付け加えたのではないかとされています。



3:33 (そして) イエスは、(彼らに答えて言う、)「わたしの母、わたしの兄弟とはだれかと答え、

マルコ福音書が書かれた時代、イエス様の弟であるヤコブはエルサレム教会の指導者となっていました。血縁の者が権力を持つことへの抗議がこの言葉の背後にあるかも知れません。

しかしそれよりも、肉体的な家族や血縁関係は、何の特権ももたらさないということを、イエス様は強調されたのではないのでしょうか。イエス様は人々の背景や家系など全く関係なく、すべての人に恵みとしてご自身をあらわされました。

3:34 (そして自分の) 周りに(を囲んで) 座っている人々を見回して言われた。「見なさい。ここに(これが) わたしの母、わたしの兄弟がいる。

イエス様はあたりを見回して言われます。ここで視線は身内の人たちから周りの人々、つまり「群衆」へと移るのです。

群衆はただイエス様の周りに座っているだけかもしれませんが。でもそれが大切なのです。イエス様と「共に在る」ことが必要なのです。イエス様は公生涯の始めから、群衆の間に身を置きました。そして群衆はいつもイエス様と共に歩みました。わたしたちも同じように、イエス様と共に在ることができるでしょうか。

3:35 神の御心を行う人こそ、わたしの兄弟、姉妹、また母なのだ。」

ここを読むと、イエス様の家族は神さまのみ心をおこなっていないのではないか、と思わされます。実際にこの文は、イエス様の家族が権威主義に走っていたことを否定するために書かれたのだとする人もいます。

確かにそのような面もあったのかもしれません。しかし、イエス様は血のつながった家族ではなく、神さまのみ心をおこなう人が自分にとっての家族なのだということです。では神さまのみ心とは何でしょうか。群衆は何をするためにイエス様のまわりにいたのでしょうか。

群衆はイエス様の言葉を聞きに来ました。イエス様が語る言葉を聞き、そしてその交わりにいるという選択をしました。それが神さまのみ心だったのです。

この箇所をルカ福音書は「神の言葉を聞いて行う人」と具体的な実践を求める言葉におきかえています。しかしマルコは、神の言葉を聞く人こそが家族なのだと言うのです。

<前半の箇所から>

ユダヤ教にとって「家族」とは、重要な意味を持っていました。聖書には系図が多く出てきますし、「(誰々の)子」という表現もよく見られます。しかしイエス様は、それよりももっと大切な「神の家族」があることを示します。それがマルコの言う「群衆」なのです。

福音書はわたしたちにも伝えます。イエス様はわたしたちをも招いておられるということ。わたしたちは群衆と共に、イエス様の交わりの中に身を置いているのでしょうか。

◆たとえで語る

4:1 (そして) イエス (彼) は、再び湖 (海) のほとりで教え始められた。(そして) おびただしい群衆が、(彼の) そば (もと) に集まって来た (来る)。そこで、イエス (彼) は舟に乗って (海の中に) 腰を下ろし、湖の上におられたが、(そして) 群衆は皆、湖畔 (海辺の陸) にいた。

イエス様は「再び」、教え始められます。実はマルコ福音書の中でイエス様が湖のほとりで教えられるのは、これが初めてです。ここは深く考えずに、「例によって」くらいの意味で考えましょう。イエス様のもとにはおびただしい群衆が集まってきます。イエス様はいつも群衆に取り囲まれるのです。イエス様の家族はイエス様から離れていきました。対照的に群衆はますますイエス様のもとへと押し寄せるのです。

4:2 (そして) イエス (彼) は (彼らに) たとえていろいろと教えられ、その中で次のように (彼らに) 言われた。

福音書には多くのたとえ話が出てきます。そしてたとえには様々な種類があります。例えばあること (たとえば神の国) を、日常的な出来事に置き換えて説明するような方法があります。それを聞いた人は何となく納得したり、不快になったり、様々な反応を示します。しかし反面、かえって何を言っているのかわからないたとえも存在します。

「たとえ」とはヘブライ語で「マーシャル」といいますが、そこには「ことわざ」の他に「謎」という意味もあります。聞き手に対して意味を明確に示すのではなく、考えさせるのです。

神の国の秘密は、むしろ隠されているのかもしれませんが。イエス様との間にある程度の関係性がないと、たとえは理解できないようになっていくのかもしれない。また当時の生活の様子を知らないとよく分からないのかもしれませんが。しかし頑張ることができるだけ、イエス様が語られた意味を考えていきましょう。

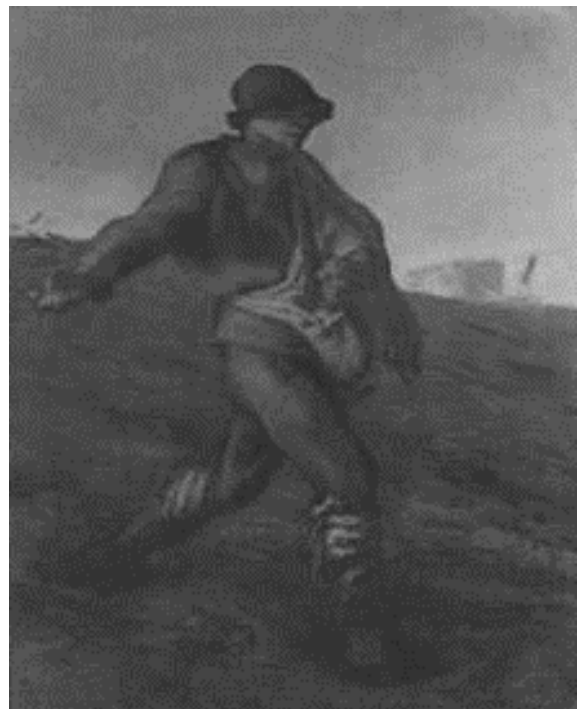
◆種と土地のたとえ

4:3 「よく聞きなさい (聞け、見よ)。種を蒔く人が種蒔きに出て行った。

このたとえは、イエス様の呼びかけから始まります。「種を蒔く人」とはイエス様のことだと考えることができます。そしてイエス様の語るみ言葉が、「種」なのでしょう。

この当時、パレスチナ地方では、種をばらまくというやり方で農業がおこなわれていたそうです。ばらまくというとすこし乱暴なイメージがありますが、広い土地に種を蒔くには、そうでもしないと時間が足りなかったのかもしれませんが。

また種を蒔く季節によって、先に鋤で土を耕すか、あるいはあらかじめ耕した土に種を蒔き、その上に薄く土をかぶせるか、二つの方法があったそうです。



いずれにせよ、群衆の中で農業をしたことがある人にとっては、種はばらまかれるものであるということだけははっきりとしていました。

4:4-7 (そして)蒔いている間に、ある種(もの)は道端に落ち、(そして)鳥(たち)が来て食べてしまった。ほかの(ある)種(もの)は、石だらけで土の少ない所(石地)に落ち、そこは土が浅い(深くない)のですぐ芽を出した。しかし、日が昇ると焼けて、根がないために枯れてしまった。(そして)ほかの(ある)種(もの)は茨の中に落ちた。すると茨が伸びて覆いふさいだ(窒息させた)ので、実を結ばなかった。

ここに三種類の土地が出てきます。昔からこれらの一つ一つの言葉に対し、特定の意味を当てはめて解釈する「寓喩的解釈」というものがおこなわれていました。例えば、道は固い心、鳥はサタン、食べてしまうことはみ言葉の働きを破壊することという具合にです。しかしそのような解釈の仕方は、今は否定されています。

その三つの土地を見てみましょう。一つ目は種が発芽することを許さない土地です。二つ目は土の下にすぐ岩があり、深く根をおろすことを許さない土地です。そして三つ目は茨が覆いかぶさり、実を結ばせない土地です。

4:13~20 には「種を蒔く人」のたとえの説明が書かれています。しかし今日はその箇所のこと忘れて、イエス様のみ言葉である種と土地だけに目を向けてみましょう。3~9 節だけから、どのようなことが読み取れるのでしょうか。

4:8 また(そして)、ほかの(いくつもの)種(もの)は良い土地に落ち、芽生え(伸び)、育って実を結び、あるものは三十倍、あるものは六十倍、あるものは百倍にもなった。」

8節に出てくる種は、4、5、7節の種と違うところがあります。日本語の聖書を読んでいてもなかなか気がつかないところなのですが、前に出た三つの箇所では単数形で書かれている種が、8節だけ複数形になっているということです。

わたしは今まで、種はほぼ同じ確率で四つのそれぞれの土地に落ちるというイメージを持っていました。ところが、この言葉の使い方を見ると、次のように読むことができます。

たまたま運悪く、道端や石地や茨の中に落ちた種もいくつかあるかもしれない。しかしほとんどすべての種は、良い地に落ちてしっかりと実を結ぶ。

いかがでしょうか。このようにイエス様の言葉を受け止めてみると、今までこの箇所から受けて来たものとは違う印象が与えられたと感じるのはわたしだけではないと思います。イエス様はこの節の言葉を強調したかったのです。このたとえはわたしたちに警告を与えているのではなく、励ましているのです。

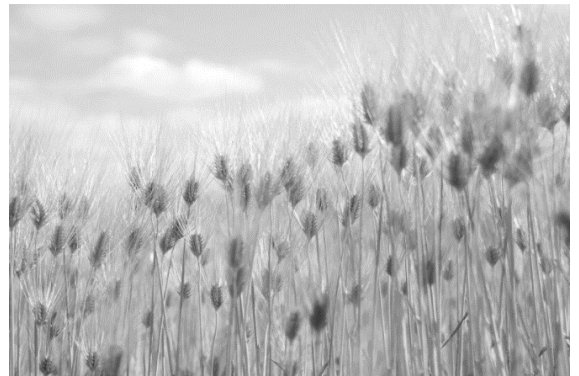
4:9 そして（彼は言った）、「聞く耳のある（を持つ）者は聞きなさい」と言われた。

このたとえば、3節の「聞け、見よ」で始まっていました。そして今、「聞く耳を持つ者は聞きなさい」と締めくくります。聞く耳を持つとはどういうことでしょうか。

それは、自分の心を開くことなのかもしれません。心の中の良い土地にみ言葉が蒔かれるように、イエス様を信じて、すべてを委ねる。その時にイエス様は、あなたの中にある良い土地に、み言葉の種をばらまかれるのかもしれません。

<後半の箇所から>

このたとえばの中で、鳥や太陽や茨は、悪いものとして登場します。しかし神さまはこれらのものを滅ぼしたり、種が駄目にならないように戦ったりすることはありません。イエス様は種を蒔かれました。わたしたちの目には、悪い土地しか見えないかもしれません。



しかしその種は、必ず素晴らしい収穫をもたらすのです。それが神さまのなさる業なのです。

わたしたちが家族や友達に福音を伝える時、わたしたちは失望することもあるでしょう。でもイエス様は伝えるのです。「すぐに実を結ばなくても、心配することはない。必ず種は、大いなる収穫をもたらすのだから」。

また、自分の心の中は良い土地ではないと感じている人にも告げるのです。「あなたの心には、あなたの知らない良い土地がたくさんある。わたしはそこにも多くの種を蒔いた。だから大丈夫。その種は必ずあなたに喜びをもたらす」。

イエス様は群衆の中に身を置きました。当時の宗教家たちは、罪人たちと積極的に交わるイエス様を非難しました。また、異邦人にも手を差し伸べられましたが、それも考えられないことでした。ユダヤ人から見たら、一見無駄なことをしているように見えるイエス様のこの姿が、まさしく種をばらまく人の姿なのです。

イエス様は知っておられるのです。群衆の中に、異邦人の中に、そしてわたしたちの中に種を蒔き続けることが、豊かな実りをもたらすことを。

今回の学びはこれで終わります。次回は4月23日(木)10時30分からです。「たとえを用いて話す理由」、「種を蒔く人のたとえの説明(マルコ4:10~20)」について学んでいきます。